税と医療の接点

東京都立第三商業高等学校　１年
藤井　絆

税金は、僕たちの生活に深く関わって、その恩恵を受けることで、僕たちの生活が成り立っていることを実感しています。僕の実体験を通して、税金の意義やその重要性について考えてみたいと思います。

僕は小学一年生の時に脳の病気を発症しました。それ以来、毎日朝晩の服薬が必要で、定期的に診察を受ける生活が続いています。３ヶ月に一度の診察や、年に二度の精密検査では、脳波測定や採血なども行われていますが、これまで一度も医療費がかかったことがありません。医療費が無償であることは、僕のような病気を持つ子供やその家族にとって大きな安心材料となっています。

このような経験から、僕は税金の意義について考えるようになりました。母も高校生の時に大病を患い、１年ほど入院と手術を経験しました。当時、医療費が高額で、祖父母に迷惑をかけてしまったと母は話していました。しかし、今では医療費控除申請書があり、税金で検査や治療ができることを母は非常に感謝しています。治療費を気にすることなく治療に専念できる環境が整っているのも、税金のおかげだと感じています。

僕が税金の大切さをさらに強く感じたのは、「１リットルの涙」という本を読んだ時です。この本を通じて、ALS（筋萎縮性側索硬化症）という指定難病があることを知りました。この病気は、時間とともに筋力が低下し、最終的には呼吸さえ困難になる非常に厳しい病気です。僕よりもっと大きな課題を抱えている人たちがいることを知り、胸が痛くなりました。

一方で、難病指定されていない病気があることも知りました。難病指定がされていないと、医療費の助成が受けられず、莫大な治療費がかかることになります。僕のように病気を持ちながらも、税金の恩恵を受けている立場からすると、すべての病気が公平に扱われるべきだと強く感じます。今後、難病指定されていない病気が一つでも多く指定され、医療費の助成を受けられるようになることを願っています。

税金は、個人だけでなく、社会全体の福祉や医療を支える重要な基盤です。僕のように病気を持つ人々が安心して治療を受けられるのは、税金が適切に使われているからこそです。また、税金は教育やインフラ整備など、僕たちの生活のあらゆる面で役立っています。僕が学校に通い、友達と変わらずに生活できるのも、税金が支えてくれるからだと感じます。

僕たちは、税金を通じて支え合い、共に生きる社会を築いています。これからも、税金が適切に使われ、多くの人々がその恩恵を受けられるような社会を目指していくべきです。僕自身も、税金の重要性を理解し、将来社会に貢献できるような大人になりたいと思っています。